

第1回
(2016.4.12)

『大学図書館の魅力と研究活動』

引原隆士教授(工学研究科・図書館機構長)

第1回：講義

- ・ 場 所：学術情報メディアセンター南館 303
- ・ 出席者：受講者 34 名 演習補助者 8 名
- ・ 配布物：PPT 講義資料(A4 両面 4 枚)、授業日程・講義構成(A4 両面 1 枚)、
- ・ 演習補助者紹介資料(A4 片面 1 枚)、アンケート(A4 片面 1 枚)

授業の目的(附属図書館 北村准教授より)

- ・ この授業の目的は、図書館利用を中心とした文献・学術情報検索についてのスキルを獲得し、それを活用してプレゼンテーションやレポートの形で発表できるようになることである。

*** 引原教授講義 ***

講義の目的と内容

- 目 的：高校時代の図書館や公共図書館とは異なる、大学図書館の魅力と研究活動を理解する。
- 内 容：研究に向けて大学図書館が持つ意義と価値を考える。また図書館資料の概略や特性を理解する。

学生にとっての図書館とはどのような場か？

資料と出会う場以外にも自学自習の場、コミュニケーションの場、研究のスキルを知る場など多様な機能を持ちうる。

図書館の成り立ち

- ・ 現在に至る歴史を見なければ、将来あるべき方向を考えることができず、発展もない。
- ・ 図書館の成り立ちとして、ヨーロッパでは教会の神学資料室として、日本では藩史編纂所として発展してきた。どちらも資料を集めてそれを共有化する場として始まった。
- ・ 印刷技術の登場により、同一の内容の書物が大量に流通するようになり、本が売買される対象になり、図書館の意義が大きく変わった。
- ・ 静寂な空間で厳格な司書が資料を守っている場であったのが、電子化された情報がネットワークによって流通する現在は、図書館の役割がまた大きく変化しつつある時代になっている。

変化しつつある近年の公共図書館

- ・ 近年の公共図書館は、デザイン性を高めることで、多くの人が訪問したいと思える空間であることを目指したり、ビジネス支援等によって行政機能の一部を担おうとしたりしている。これらから、公共図書館は今、人が集まり出会いにあふれそれぞれの町の個性が表れる空間へと進化しつつあると言える。

京都大学図書館はどのような場所か？

- ・ 50 以上の図書館/図書室で構成されている大きなネットワーク。
- ・ 学習室 24、共同研究室、ラーニングcommonsのように、自学自習、読書、議論と多様な活動ができる空間。
- ・ 野口英世の博士論文や解体新書等の貴重な資料が保存されている。
- ・ 学習サポートデスクのように、論文・レポートの書き方が学べる。

図書館と研究活動

- ・ 最近特に利用されるのは電子ジャーナル、データベース、誰でも使えるオープンアクセスアーカイブや、大学が資料を電子的に公開しているリポジトリ。資料は世界中から取寄可。
- ・ 文献収集しつつどれが正しいか精査し、その成果を発表して出版するという研究スタイル。
- ・ 本に何でも書いてあるかという、そうではない。
- ・ 様々な電子的資料を KULINE 等でどこでも閲覧でき便利だが、どれを選ぶかは個人の能力次第。トライ&エラーでスキルを向上させなければ、単にデータがあるだけになってしまう。
- ・ e-learning では論理の展開過程等が欠落する場合があります、同時に反転授業等を突きつけなければならない。大学はそこに足りないものを補う場なので、対話し議論することが重要。
- ・ 研究をサポートする側は、サポートを受けた人が喜んだり、一歩前に進む結果を得られたりした時に一歩成長する。お互い成長するには、無理と言わずにやってみることが重要。

論文の読み方、電子的資料と研究活動

- ・ 最近に関連論文をサジェストする機能があるが、皆が同じ方向に進むことが研究なのか。
- ・ 学生時代の教員の言葉「論文はできるだけ読むな。論証に必要なものだけにする。不要な

- ものを読み過ぎてしまうと、影響されて自分の考えを失ってしまう。」
- 論文を読むときは結論から読む。その次に図表等を読み自分でイメージを確立してから、初めて冒頭から通して読む。そうしないと著者の誘導を受けてしまい、批判的に読めなくなってしまう。
 - ナビゲーションの能力と情報収集の能力が必要。トライ&エラーしながら新しいアイデアを作ることが重要であり、狭い世界での自己満足に陥ってはいけない。

現在の研究の傾向

- 前の研究は正しいとされており、前の研究を僅かに広げた/深めた研究は間違いとは言えない、という傾向にあるが、その延長線上にパラダイムシフトはない。
- 研究分野がすでに成熟している場合は結果も出しやすいが、それよりも成熟へと展開する前の過程の方が大切である。安易な結果の量産ではなく、新規のフロンティアにも注力する必要がある。

Open Source と Open Access

- なるべく Open にしようという考え方がある。Linux 等は Open Source で作成された OS だが、Wikipedia 同様、皆で構築し、コントロール。Open で進める方が速いことが証明された。
- 学術情報も Open になるほど速く進む。インターネットで、学術情報を無料で閲覧可能にするのが Open Access。Open にして、少ないエネルギーで皆ができるようにすることが重要。
- 2013 年 4 月から博士論文の電子公開義務化。大学での研究は公共の財産という認識。学生 1 人 1 人の育成には多くの費用が投じられており、それによって得られた知識や結果は皆に還元すべき、という発想は根本的に必要。
- 上記を踏まえて、京都大学はオープンアクセス方針も制定している。

*** その他 連絡事項 ***

- 第 1 回アンケートの記入・提出のお願い。
- 期限内に履修登録を行うこと。
- 授業日程に使用教室が記載されているが、回によって教室が変わるため要注意。
- 演習では ECD-ID が必要となる。
- 授業用 Web ページと Twitter (@ku_tansaku) についてアナウンス。

(記録：坂本 拓)